

第5講 布づくりの考古学－編む・織る・紡ぐ－

宮原俊一(東海大学講師)

はじめに : 直接資料と間接資料からの究明

古代の布や衣服が考古資料として現在まで残ることは非常にまれである。たとえば、泥炭層遺跡や古墳の石室内など、特殊な環境下で発見される場合もあるが、ほとんどの布や衣服は経年の劣化により朽ちててしまう。また、特殊な条件のもとであっても、発見されるのは編み物や布の断片であり、こうした資料上の制約から衣服そのものを復元することはきわめて困難となっている。

しかし、少ないながらもこれまで出土した直接的資料を手がかりに、布製品の構造や使用された材料(素材)の分析がおこなわれ、布製品とその製作技術の一端が明らかにされつつある。また、直接的な資料でなくとも、木製品または鉄製品といった紡織に関わる道具の分析から、どのような製品がつくられていたかを推定することは可能である。さらに、土器に残された痕跡(圧痕)も有効な間接的証拠となる。これらの圧痕を詳細に観察することで、圧痕の正体や構造をある程度把握することができるのである。

このように、出土遺物として直接的な資料が乏しくとも、間接的資料との統合によって、古代の布や衣服、またはその製作技術に迫ることは可能なのである。

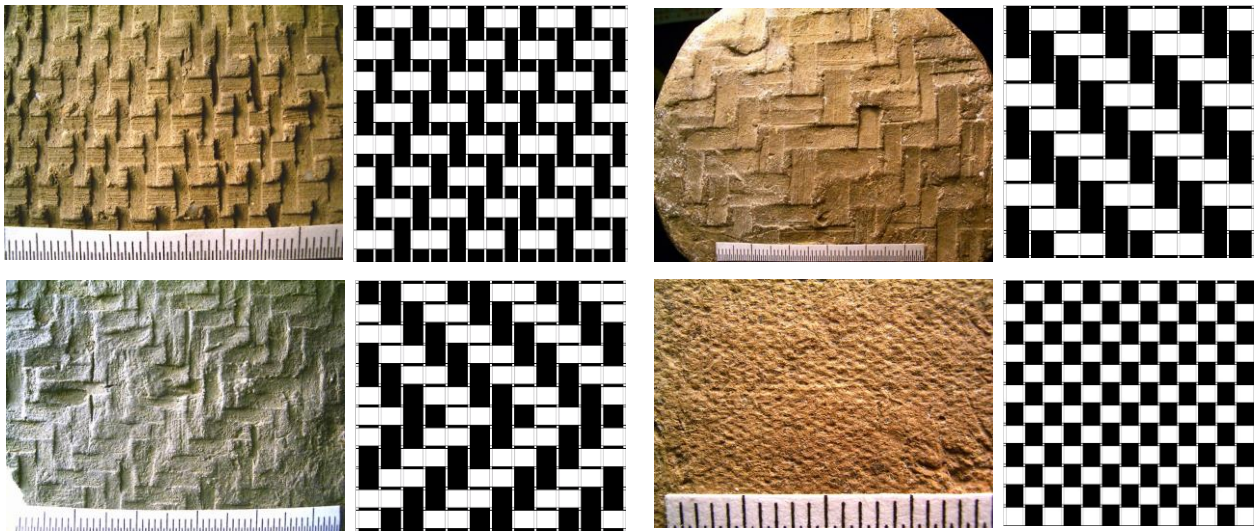


写真1 土器底部圧痕 1~3 編組製品圧痕(縄文時代後期)、4 織布圧痕(弥生時代中期)

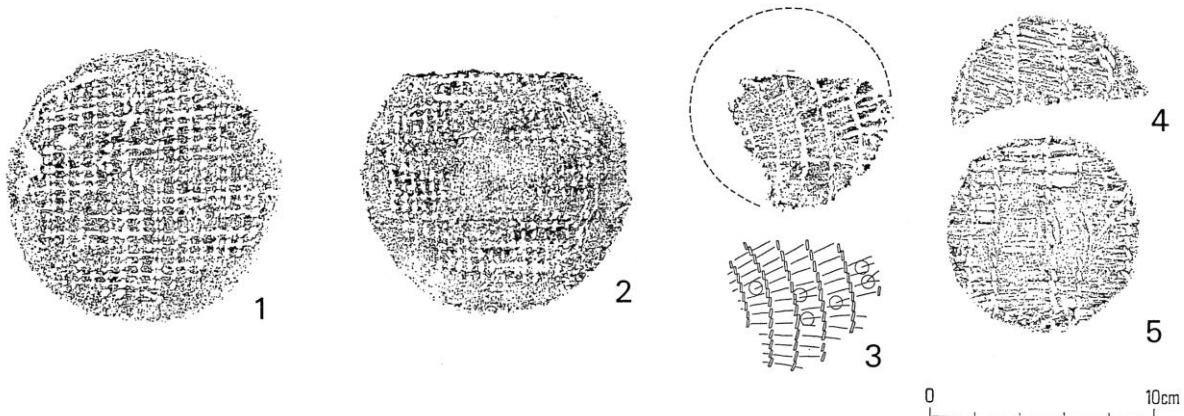
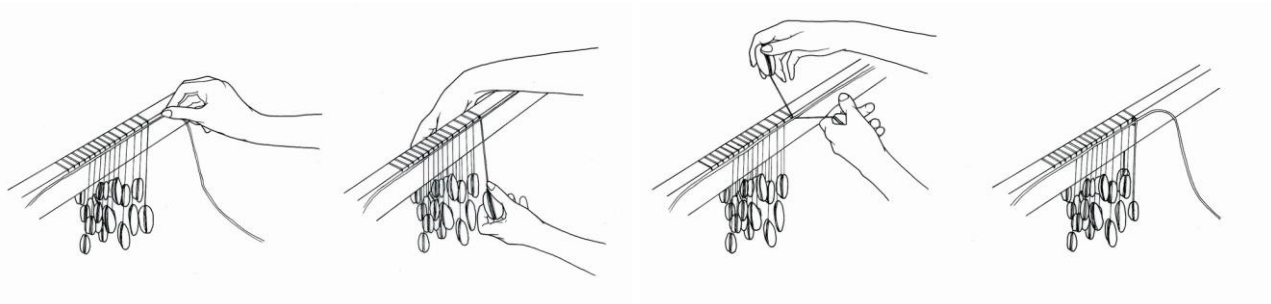


図 1 スダレ状圧痕拓影[渡辺 1976]

(1 秋田県大湯遺跡、2 石川県古府遺跡、3 岐阜県宮ヶ原遺跡、4・5 熊本県轟貝塚)

1 縄文の布 —^{あんぎん}編布—

編布とは文字通り編んでつくられた布のことで、**もじり編み**と呼ばれる方法によってつくられる。



1. おもりのついた経糸を横木に吊るし、緯糸を横木(編台)にそえる。

2. 経糸のおもりは常に一対で扱う。

3. おもりを編台の上で交差させ、からませる。

4. すべての経糸を一本ずつ緯糸にからませて、緯糸を折り返す。

図 2 もじり編み

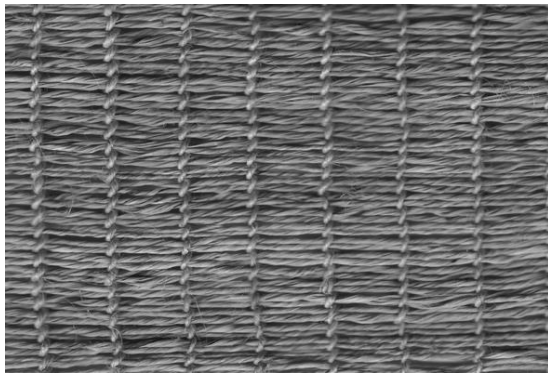


写真2 もじり編みの組織構造(左)と平織りの組織構造(右)



写真3 越後アンギンとアンギン製作の道具[滝沢 1983 より転載]



写真4 帯状の痕跡をもつ縄文時代の石錘

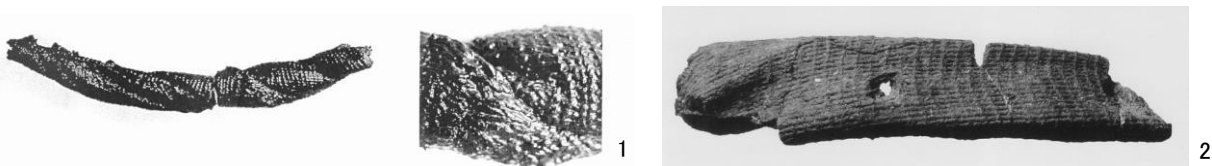


写真5 出土編布(1 秋田県中山遺跡、2 石川県米泉遺跡)

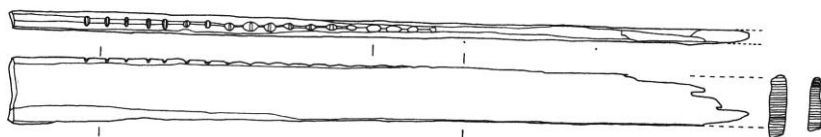


図 3 出土木製品: 編台 (富山県江上 A 遺跡: 弥生時代後期)

資料 3

2 弥生時代の織機

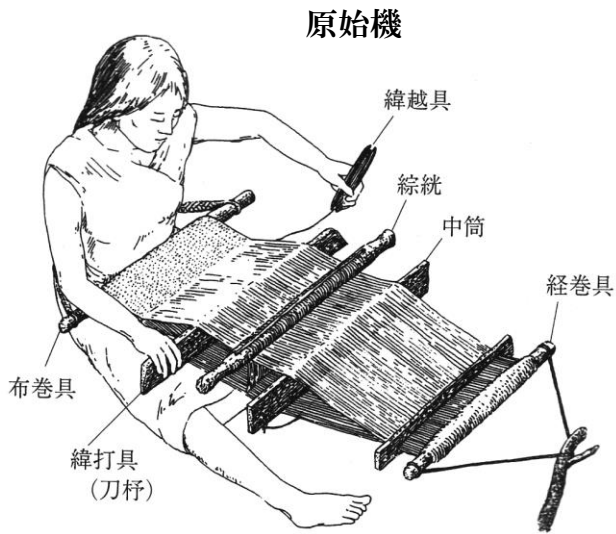


図 5 原始機の復元[森 1979 より転載]

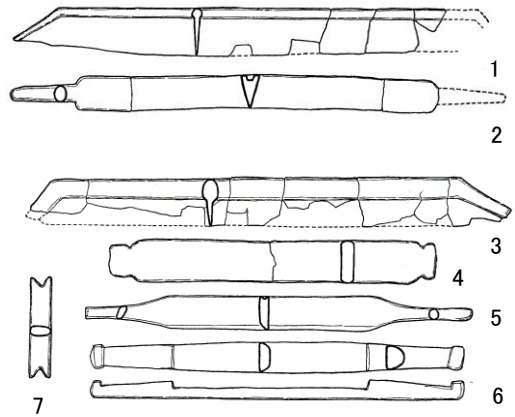


図 4 弥生時代の織機
(1・2 奈良県唐古遺跡、3～7 静岡県登呂遺跡)

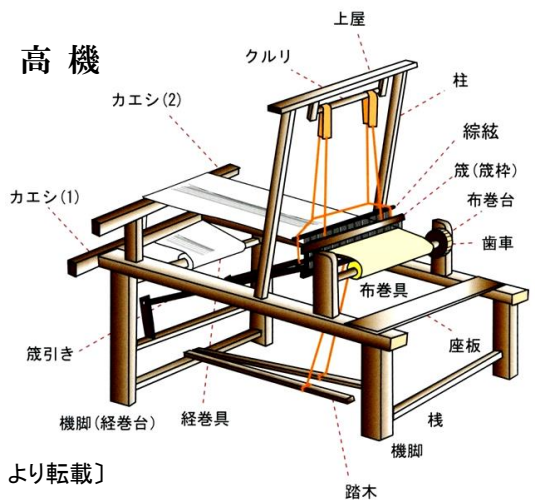
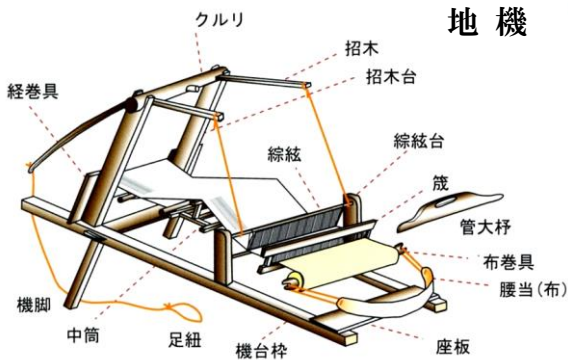


図 6 地機と高機[黒須 2006 より転載]

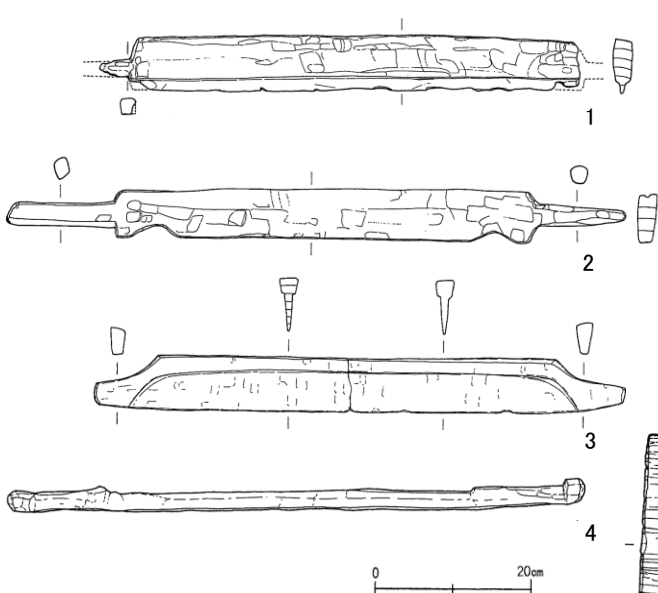


図 8 神奈川県池子遺跡群出土木製品
(1・2 布送具、3 緯打具、4 布巻具または綜統、5 経送具)

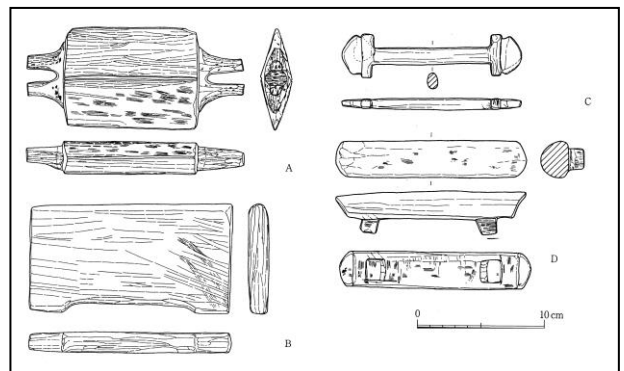
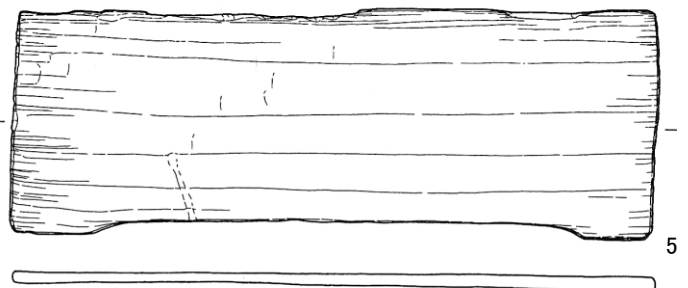


図 7 上細井稲荷山古墳出土の石製祭器



3 原始機二様

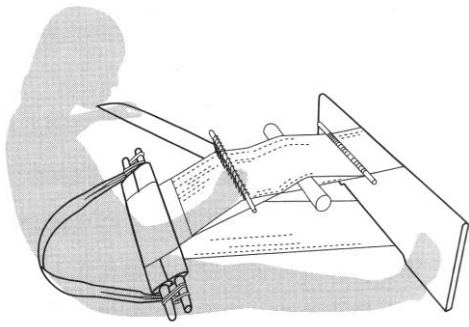


図 9 原始機輪状式の操作推定図[東村 2011 より転載]

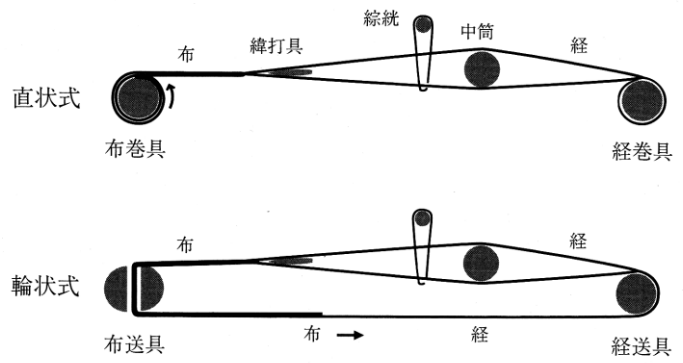


図 10 直状式と輪状式(東村 2011 より転載)

4 紡錘を回し糸をつくる

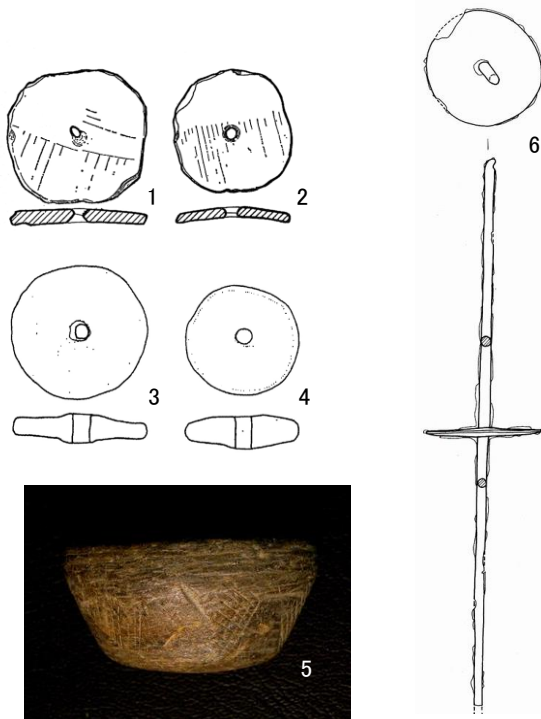


図 11 出土紡錘
(1~4 土製:弥生時代、5 石製:古墳時代、6 鉄製:平安時代)



写真6 繊維素材(カラムシ)

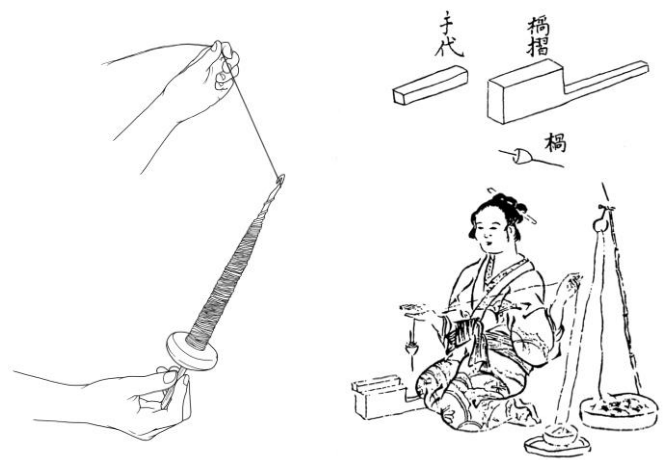


図 12 紡輪による回転撚法
(左図:『越能山都登』より)

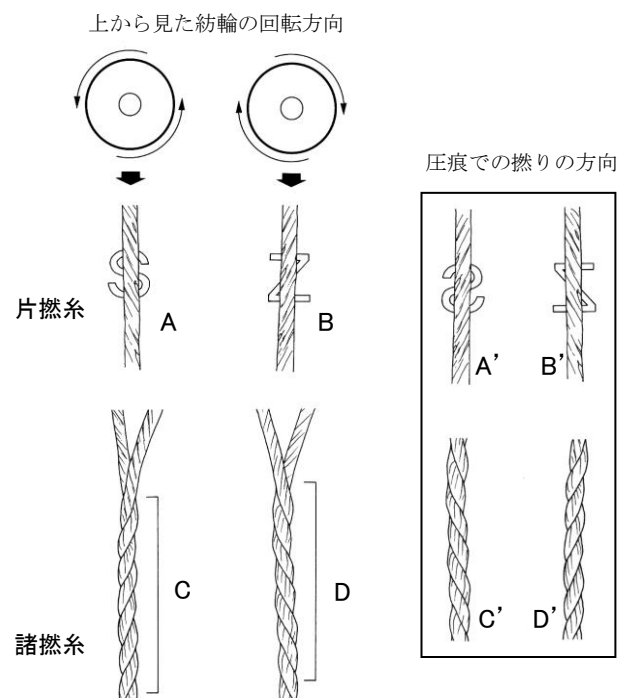


図 13 紡錘車の回転方向と糸の撚りの方向